九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

思春期・青年期における周囲の他者からの被受容感と自己の「本来感」の関連

石原, 由美
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/26141

出版情報：九州大学心理学研究. 14, pp.117-124, 2013-03-01. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2013, Vol.14, 117-124

思春期・青年期における周囲の他者からの被受容感と自己の「本来感」の関連

石原　由美　　九州大学大学院人間環境学府

The relations between the sense of acceptance from close ones and that of authenticity during puberty and adolescence

Ishihara Yumi（*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*）

This study investigates the relations between the sense of acceptance from close ones and that of authenticity during puberty and adolescence. The Sense of acceptance（from family, friends, and teachers）Scale（SACS）and the Sense of Authenticity Scale（SOAS）were completed by 270 junior high school, 167 high school, and 315 university and special school students in Japan. The result of the correlation analysis indicated the following:;（1）In all schools, the score of SACS was positively correlated to that of SOAS.,（2）The developmental changes in the formation of the sense of authenticity require a sense of acceptance from close one during puberty and adolescence.

Key Words: Sense of authenticity, sense of acceptance, puberty, adolescence

Ⅰ．問題と目的

自尊感情（Self-esteem）は James（1892／1992）に定義されて以来，その高さが精神的健康や適応の指標となりうると考えられてきた。例えば，自尊感情の高い者は低い者と比べて抑うつが低く（Tannen & Herzberger, 1987），対人関係のあり方もよい（Griffin & Bartholomew, 1994）ことが示されている。しかし近年，高い自尊感情は必ずしも精神的健康や適応の指標となり得る訳ではないという報告がされている。例を挙げると，Kernis et al.（1989）は自尊感情と攻撃との間に正の相関がある事を示している。また，反社会的逸脱へのあこがれが強い中学生の自尊心は高いという報告もある（楡木，2005）。これらの報告を受けて，自尊感情の定義についての見直しがなされている。

このような流れの中で，Deci & Ryan（1995）は，自尊感情を随伴性自尊感情（Contingent self-esteem）と本当の自尊感情（True self-esteem）に区別する見方を提示している。随伴性自尊感情とは，自己価値の感覚が何らかの外的な基準に依存しており，その基準上で高いパフォーマンスを達成することで得られる自尊感情と定義される。一方，本当の自尊感情とは，自己価値の感覚に，社会的な成功や失敗などといった外的根拠を必要としておらず，自分が自分らしくいるだけで感じられる自尊感情であると定義される。随伴性自尊感情と本当の自尊感情の質的な違いとしては，随伴性自尊感情は外的な要因によって引き起こされる自尊感情であり，本当の自尊感情は内的・自発的に湧き上がってくる自尊感情であるということが挙げられる。Deci & Ryan（1995）は，前者が不適応的な，後者が適応的な自尊感情であると述べている。これについて，他者との関係の中に人間の本質をとらえる相互協調的自己感の中で社会生活を営んでいる日本人（清家・高田，1997）においては，他者の目を過剰に気にすることによって自尊感情が左右されるといった，随伴性自尊感情の不適応的な面が表れやすいと考えられる。このような状況においては，自発的に生じ外的な価値基準に左右されることのない本当の自尊感情の方がより大切になってくると考えられる。

そこで本研究においては，本当の自尊感情にきわめて近い概念である「本来感」（Sense of Authenticity）（伊藤・小玉，2006a）を取り上げる。本当の自尊感情は自分らしくあることによって自然とわき起こる自己価値の感覚であり，厳密には本来感と区別される概念である（伊藤・小玉，2005）。しかし，本当の自尊感情とは本来感があることによって起こる感情であるため，本来感と本当の自尊感情には非常に深い関係があるといえる。

本来感について，伊藤・小玉（2005）は「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と定義した。この研究において，自己決定している感覚である「自律性」については，本来感が正の影響を与え，本来感を統制した自尊感情が負の影響を与えているという結果が出ている。また，伊藤・小玉（2006a）の研究において，自尊感情の随伴的な側面である随伴性自尊感情と本来感が自律性に及ぼす影響をみたところ，本来感は自律性に対して正の影響を，随伴性自尊感情は負の影響を与えるという結果が出た。このようなことから，本来感は人の主体的な行動に影響を及ぼす要因として，また外的な要因に関わらず人の内側から起こる自尊感情とし

て，精神的健康にも関わる非常に重要な感情であると考えられる。よって，本来感が形成される要因については検討する必要があるといえる。

これについて伊藤・小玉（2005）は，本来感を形成させる要因の一つとして，無条件の肯定的配慮（Harter, 2002）があるのではないかということを指摘している。無条件の肯定的配慮とは，特定の条件や基準にはとらわれない他者からの受容の事である。すなわち，いい子を演じたり何らかの秀でたパフォーマンスを行ったりしなくとも，ただありのままの自分を認めてくれることを指す。Deci & Ryan（1995）は，無条件の肯定的配慮は安定した自己感覚を形成させ，そのような自己感覚を有する個人は，人格的成長や意味ある他者関係といった外的な社会的価値基準には囚われない内発的な向上心を志向すると論じている。本来感は先にも述べたように，外的な価値基準に左右されることがなく，自分が自分らしく行動でき，それでいいと感じる感覚のことである。しかし，内発的な感覚であっても，その感覚が形成される過程においては周囲からの影響を全く受けないということは考えにくい。伊藤・小玉（2005）は，無条件の肯定的配慮の経験は本来感を促進するものであると同時に，自律性，人格的成長などという内発的な向上心とも深くかかわっているのではないかと論じている。このことから，本来感が形成されるためには，何らかの基準に依ることなく自己を他者から受容・肯定してもらう感覚が重要ではないかと考えられる。

ここで，無条件の肯定的配慮を受けた者が抱く感覚として，被受容感があげられると推察される。被受容感とは，自分を支えてくれる他者の存在を感じ，自分は他者から一定の理解やあたたかさ，承認を持って大切に扱われ，支えられているという認識と情緒のことである（杉山，2002）。近江ら（2004）によれば，被受容感を感じるのは，父親・母親・親しい友人といった重要な他者に，肯定的なサポートを得る場合であるという。これは，他者から無条件の肯定的配慮を受ける場合と非常に近い状況であると考えられる。つまり，無条件の肯定的配慮が本来感を形成する要因の一つである可能性があるならば，他者から無条件の肯定的配慮を受けた人に生じるであろう被受容感と本来感の間にも何らかの関係があるのではないかと考えられる。よって本研究では，被受容感と本来感の関連性をみることとする。

なお本研究においては，調査対象として中学生，高校生，大学生を対象とした。思春期・青年期は，類似した他者との社会的比較によって自己評価をする傾向が最大になり（高田，1992），心理臨床の現場では対人恐怖的訴えが多い（堀井，2002）。これらのことから，思春期・青年期は他者からの評価や外的な基準を気にする傾向が強くなるといえる。そのような時期においては特に，自分がありのままの自分でいられるという感覚は精神的健康ともかかわってくるし，自己決定においても何らかの影響を及ぼすと推察される。また，思春期・青年期は家族や親友をはじめとする重要な他者をめぐる変化が大きい時期でもあるとされている（則定，2008）。ここで筆者は，重要な他者をめぐる変化が大きい時期であれば，誰との関係において被受容感を感じるのかということによって，本来感の感じ方に差が出るのではないかと考えた。よって，本研究では本来感と被受容感をめぐる発達的な変化についてもみていくこととする。

Ⅱ．方　　法

調査対象者

X 県にある私立の中学校・高等学校一貫校に通う中学生 270 名（男性 151 名，女性 119 名），高校生 167 名（男性 95 名，女性 72 名），Y 県にある国立 1 校，私立 1 校の 2 つの大学に通う大学生（男性 74 名，女性 185 名）および，専門学校 2 校に通う専門学校生（男性 41 名，女性 15 名）が対象となった。大学生および専門学校生は 18 歳～24 歳までの者を対象とした。中学生の平均年齢は 13.76 歳，高校生の平均年齢は 16.19 歳，大学生の平均年齢は 19.64 歳，専門学校生の平均年齢は 20.71 歳であった。

調査時期・調査方法

調査時期は 2011 年 12 月。個別自記入式の質問紙調査で実施された。中学生・高校生は学校に依頼し，クラスごとに各担任の教員が実施した。大学生・専門学校生は授業時間中，もしくは授業時間前後に実施した他，直接または知人を通してアンケートを配布・回収した。なお，回答はすべて無記名で行われた。

調査内容

(1) フェイスシート

中学生・高校生に対しては，性別・学年・年齢の記入を求めた。また，大学生・専門学校生に対しては，性別・所属学部・学年・年齢の記入を求めた。

(2) 被受容感尺度

平岩（1996）により作成された「安心感」尺度の下位尺度である「受容」尺度を筆者が修正した 9 項目の尺度を用いた。回答は 5 件法（1. 全くそう思わない，2. あまりそう思わない，3. 少しそう思う，4. まあそう思う，5. そう思う）で求めた。中学生・高校生に対しては，「家族と一緒にいるとき（以下，「家族対象場面」）」「友人と一緒にいるとき（以下，「友人対象場面」）」「先生と一緒にいるとき（以下，「先生対象場面」）」という 3 場面を設定し，その際に被受容感を感じる程度の強さについて

回答を求めた。大学生・専門学校生は，中学生・高校生と共通の場面に「恋人と一緒にいるとき（以下，「恋人対象場面」）」という場面を加えた4場面を設定し，同様に回答を求めた。

(3) 本来感尺度

伊藤・小玉（2005）により作成された7項目の尺度をより回答し易い形に修正し，5件法（1. 全くそう思わない，2. あまりそう思わない，3. 少しそう思う，4. まあそう思う，5. そう思う）で回答を求めた。

Ⅲ．結果と考察

1. 尺度の検討

本来感尺度

本来感尺度7項目について，主因子法・*promax* 回転で因子分析を行った結果，1因子を抽出した。また，項目4（「他人と自分を比べて落ち込むことが多い（※反転項目）」）の負荷量が極端に低い値（.13）を示したため，この項目を除外した6項目で本来感尺度を構成した。内的整合性を確認するため，Cronbach の α 係数を算出したところ，.857と高い値が得られた（Table 1）。

被受容感尺度

被受容感尺度9項目について，大学生・専門学校生に対してのみ設定した「恋人対象場面」ではいずれの項目においても天井効果がみられた。そのため大学生・専門学校生における「恋人対象場面」は除外し，全ての学校種において，「家族対象場面」，「友人対象場面」，「先生対象場面」の3場面を分析に用いることとした。そこで学校種・場面別に主因子法・*promax* 回転で因子分析を行った。中学生の各場面における被受容感尺度の項目について，場面別に主因子法・*promax* 回転で因子分析を行った結果，すべての状況において1因子を抽出した。また，高校生，大学生・専門学校生の各場面においても同様の結果がみられた。項目はすべての学校種・場面において共通しているため，中学生の「家族対象場面」における因子分析の結果を Table 2 に示す。また，α 係数はいずれの学校種・場面においても高い値が産出された（【中学生】「家族」α=.968,「友人」α=.956,「先生」α=.967；【高校生】「家族」α=.954,「友人」α=.960,「先生」α=.951；【大学生・専門学校生】「家族」α=.948，「友人」α=.927,「先生」α=.931）。

学校種別にみた被受容感の発達的変化

場面別に学校種を独立変数，被受容感を従属変数とした一要因分散分析を行った。「家族対象場面」においては，有意な差がみられた（$F_{(2,749)}$=7.86, p<.001）。*Tukey* 法（5％水準）による多重分析を行った結果，大学生・専門学校生の方が他の2つの学校より有意に家族からの

Table 1
本来感尺度の因子分析結果（主因子法，*promax* 回転）

番号	項目内容	負荷量
2	私は「自分」というものを持っていると思う	.783
3	人前でもありのままの自分を出せる	.769
1	私は大体の場面で自分らしくいられる	.722
5	私は大体の場面で自分のやりたいことをやることができる	.715
7	私は自分を見失わないでいられる	.647
6	これが自分だ、と実感できるものがある	.617

Table 2
家族対象場面における被受容感尺度の因子分析結果（主因子法，*promax* 回転）【中学生】

番号	項目内容	負荷量
8	幸せだと感じる	.912
3	気持ちがみたされている	.900
7	胸が暖かい感じがする	.892
1	心地よい感じがする	.892
9	穏やかな気持ちである	.891
5	大切にされていると感じる	.863
6	理解されていると感じる	.859
2	受け入れられていると感じる	.858
4	守られているという感じがする	.851

被受容感が高かった。「友人対象場面」においても，有意な差がみられた（$F_{(2,749)}$=3.11, p<.05）。*Tukey* 法（5％水準）による多重分析を行った結果，中学生の方が高校生よりも有意に友人からの被受容感が高かった（p<.05）。「先生対象場面」においても，有意な差がみられた（$F_{(2,749)}$=38.83, p<.001）。*Tukey* 法（5％水準）による多重分析を行った結果，中学生の方が高校生，大学生・専門学校生よりも有意に先生からの被受容感が高かった。

「家族対象場面」では大学生・専門学校生が最も高く被受容感を感じていた。西平（1990）は，思春期から青年中期においては，子供が親への依存を払拭しようと試みるが根底には親への依存欲求がある第一次心理的離乳，青年中期から青年後期においては親からの自立の方向に重点を移し，親子の絆を再生・強化していこうとする第二次心理的離乳が起こるとした。思春期にあたる中学生は親に対して葛藤的になるため，家族全体からの被受容感は低く認知すると考えられる。その後発達するにしたがって親との関係が変化するため，家族からの被受容感が感じられるようになると推察される。「友人対象場面」では中学生が高校生より被受容感を多く感じていた。保坂・岡村（1986）によると，中学生はチャムグループといい，友人同士の共通性や一体感を重視する友人関係を築く。高校生になると，ピアグループといい自主性・自律性を重視するような友人関係を築く。中学生が高校生よりも友人に被受容感を感じているのは，チャムグループ的な関係において被受容感的な関わりに敏感であり，より強くそれを求める傾向にあるため，そのような関わりを認識し評価する傾向にあるからであると考えられる。「先生対象場面」では，年齢が上がるに従い被受容感が減少した。これは，各学校において先生と接する頻度や，関係性が変化することなどによるものであると考えられる。

学校種別・場面別にみた被受容感のタイプ

調査対象者を，各場面における被受容感の感じ方によって群分けするため，「家族対象場面」における被受容感９項目，「友人対象場面」における被受容感９項目，「先生対象場面」における被受容感９項目のそれぞれの項目についてクラスタ分析を学校種別に行った。

被受容感尺度について，各対象場面における項目得点を合計し，標準化したものを場面別得点とした。その場面別得点を変量として *Ward* 法によるクラスタ分析を行い，クラスタの解釈の明瞭さを考慮し，５つのクラスタを抽出した。また，χ^2 検定を行ったところ有意な人数の偏りがみられた（χ^2=51.48, df=4, p<.001）。カテゴリー名について，第１クラスタは，学校での先生との関係という公的な関係よりも家庭や友人といった私的な関係においてより被受容感を感じていると解釈し，「プライベート重視群」とした。第２クラスタは全体的に被受容感が低かったため，「全面的低群」とした。第３クラスタは，家族との関係において被受容感を多く感じていると解釈し，「向家庭群」とした。第４クラスタは，家庭よりも友人や先生といった社会的な場から被受容感を多く感じていると解釈し，「向学校群」とした。第５クラスタは，全体的に被受容感が高かったため「全面的高群」とした（Fig.1）。

中学生において，被受容感の感じ方によって群分けをしたところ，「プライベート重視群」「全面的低群」「向家庭群」「向学校群」「全面的高群」という５つの群に分かれた。「プライベート重視群」は家族と友人といったプライベートな人間関係において被受容感を感じている一方，先生とは家族や友人ほど関わりを持たない可能性がある群，「全面的低群」は対人関係における被受容感を感じにくく，対人関係における適応感が低いであろう群，「向家庭群」は家族からの被受容感は高いが，友人・先生といった学校場面においては受け入れてもらえないという感覚を持つであろう群，「向学校群」は学校における対人関係上で受け入られるという体験をしているであろう群，「全面的高群」は対人関係上で適応感を高く感じているであろう群であることが推察できる。

高校生も，中学生と同様にクラスタ分析を行った。被受容感尺度について，各対象場面における項目得点を合計し，標準化したものを場面別得点とした。その場面別得点を変量として *Ward* 法によるクラスタ分析を行い，クラスタの解釈の明瞭さを考慮し，３つのクラスタを抽出した。また，χ^2 検定を行ったところ有意な人数の偏りがみられた（χ^2=17.11, df=2, p<.001）。カテゴリーについて，第１クラスタは全体的に場面別得点が高かったため，「全面的高群」とした。第２クラスタは全体的に場面別得点が中程度の高さだったため，「全面的中群」とした。第３クラスタは場面別得点が概して低かったため，「全面的低群」とした（Fig.2）。

高校生においては，「全面的高群」「全面的中群」「全面的低群」の３つの群に分かれた。「全面的高群」は対

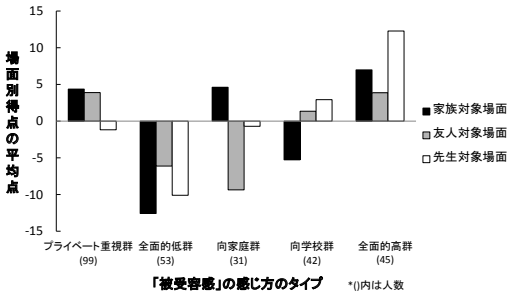

Fig.1　中学生における被受容感尺度の場面別得点

人関係場面において適応感を強く感じているであろう群，「全面的中群」は中程度に被受容感を感じているであろう群，「全面的低群」は，対人関係場面において適応感が低いであろう群であることが推察できる。

大学生・専門学校生においても，中学生，高校生と同様にクラスタ分析を行った。被受容感尺度について，各対象場面における項目得点を合計し，標準化したものを場面別得点とした。その場面別得点を変量として *Ward* 法によるクラスタ分析を行い，クラスタの解釈の明瞭さを考慮し，4つのクラスタを抽出した。また，χ^2 検定を行ったところ有意な人数の偏りがみられた（χ^2=56.72, df=3, p<.001）。

カテゴリーについて，第1クラスタは全体的に被受容感が低かったため，「全面的低群」とした。第2クラスタは，学校，特に学業に直接かかわる先生からの被受容感を強く感じていると考え，「学業重視群」とした。第3クラスタはいずれの場面においても被受容感が高かったため，「全面的高群」とした。第4クラスタは，パブリックな場よりも家族や友人を対象としたプライベートな場において被受容感を強く感じると考え，「プライベート重視群」とした（Fig.3）。

大学生・専門学校生においては，「全面的低群」「学業重視群」「全面的高群」「プライベート重視群」という4つの群に分かれた。「全面的低群」は対人関係上で適応感を感じにくいであろう群，「学業重視群」は学業に重きをおいており，結果として先生からの被受容感を高く感じているであろう群，「全面的高群」は対人関係において適応度が高いであろう群，「プライベート重視群」は家族・友人といったプライベートな関係を重視している一方，先生とは関わる機会が少ない可能性がある群であると考えられる。

クラスタ別にみた本来感の違い

クラスタの群別にみた本来感の差をみるため，クラスタ群を独立変数，本来感を従属変数とする一要因分散分析を学校種別に行った。結果を以下に示す。

中学生

中学生において分析を行ったところ，有意な差がみられた（$F_{(4, 265)}$=11.51, p<.001）。*Tukey* 法（5%水準）による多重比較を行ったところ，全面的高群とプライベート重視群，全面的低群，向家庭群，向学校群の間に有意な差がみられた。また，プライベート重視群と全面的低群の間にも有意な差がみられた（いずれも p<.05）。加えて，プライベート重視群と向家庭群の間に有意な傾向がみられた（p<.10）。すなわち中学生において，全面的高群は他の4つの群よりも有意に本来感が高く，プライベート重視群は全面的低群よりも有意に本来感が高いということが示された。また，プライベート重視群の方が向家庭群よりも有意に本来感が高い可能性があるということも示された（Fig.4）。

中学生においては，「全面的高群」は他の群よりも本来感を強く感じているという結果が出た。これは問題と目的において，被受容感と本来感の間に何らかの関連性があるとした仮説を支持しているといえる。次に，中学生の特徴をあげる。中学生においては，「プライベート重視群」が「全面的低群」よりも本来感を高く感じていたということが特徴として挙げられる。これは，中学生においては家庭と友人からの被受容感が本来感の高低と深く関連しているということを示している。 これについて山本ら（2010）の研究では，中学生において家庭の雰囲気への認知が自己価値に影響を及ぼすという結果が出ている。家庭に対し，「楽しい」「あたたかい」などのポジティブな雰囲気を感じているほど自分自身に肯定的であり，逆に「冷たい」「からっぽな」などといったネガティブな雰囲気を感じているほど自己に否定的であった。これと同様のことが本研究においても示されたといえよう。自己価値とは，自分自身に対し自分がどれほど

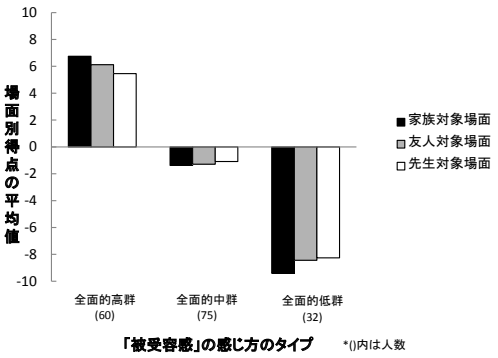

Fig.2　高校生における被受容感尺度の場面別得点

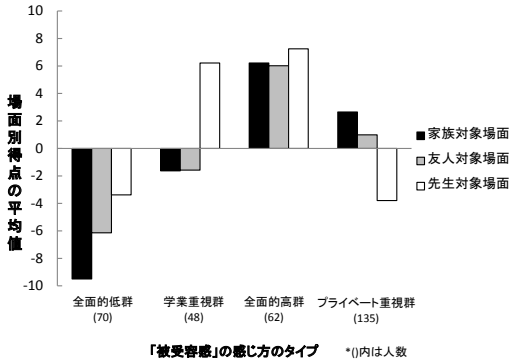

Fig.3　大学生・専門学校生における被受容感尺度の場面別得点

価値があるかと認識する程度であるが，それは自尊感情と非常に近いものであるといえる。すなわち，家族から受け入れてもらっているというポジティブな感覚である被受容感は，本来感の形成に関連しているということが考えられる。また中学生の頃になると，友人との関係が重要性を増してくることがいわれている。梅本（2000）は，二次性徴の発現に代表されるように，身体的・性的発達が著しく，心身共に自己への興味・関心が深まることから，思春期においては様々な疑問や不安，悩みを抱えやすいとしている。そのうえで，こうした疑問や不安，悩みは，似た立場・状況にある同性，同年輩の友人のほうが共有しやすいということを推測している。よって，友人は特に思春期において重要な他者となり，友人からの被受容感は家族からの被受容感同様，本来感形成に大きな影響を与えるといえる。そして本研究においては，中学生を対象とした場合，「プライベート重視群」の方が「向家庭群」よりも本来感が高くなる傾向があるという結果が出た。「プライベート重視群」と「向家庭群」の違いは，友人からの被受容感を高く感じているか低く感じているかということである。これらのことを考えると，本来感との関連に関しては，友人からの被受容感の方が家庭からの被受容感よりも深く関わってくる可能性があるということが考えられる。このことについては以下の先行研究に詳しい。梅本（2000）は，中学生の頃になると，「何でも打ち明けて話し合える相手」や「相談相手」として親以上に友人が挙げられるようになり，親や大人の意見よりも友人の意見を受け入れる，いつも友人と一緒にいたがるなどの行動がみられるようになってくるとしている。実際に内閣府政策統括官（2007）の調査によると，中学生において「困ったことや悩みの相談相手」として1位に挙げられているのは，男女ともに「同性の友達」であった。このことから推察すると，中学生においては家族よりも友人の方が重要な他者となりうることが分かる。また，友人は「何でも打ち明けて話し合える相手」や「困ったことや悩みの相談相手」として，つまり自分のありのままをみせてもよく，またそれを受容してもらえる相手として重要な地位を占めていると考えられる。この関係において，ありのままの自分をみせ受容してもらうことが，中学生の本来感に影響を与えている可能性があるといえる。

高校生

高校生において分析を行ったところ，有意な差がみられた（$F_{(2,164)}$=7.24, p<.01）。*Tukey* 法（5％水準）による多重比較を行ったところ，全面的高群と全面的中群，全面的高群と全面的低群，全面的中群と全面的低群の間に有意な差がみられた（p<.05）。すなわち高校生において，全面的高群は他の２つの群よりも有意に本来感が高く，全面的中群は全面的低群よりも有意に本来感が高いことが示された（Fig.5）。

高校生においても，「全面的高群」は他の群よりも本来感を強く感じているという結果が出た。加えて，「全面的中群」の方が「全面的低群」よりも本来感を感じていることも示された。これは，被受容感と本来感の間に何らかの関連性があるとした仮説を支持しているといえる。このことから高校生において，本来感にとって重要なのは，どの場面において被受容感を感じるかということではなく，総合的に周囲から被受容感を感じられているか否かということであると考えられる。鎌野ら（2010）は，高校生は精神的自立が進み，親が年をとっていくことがみえてくるとともに，家族・親を大切に思う気持ちが芽生えてくるとしている。また則定（2007）においては，高校生も中学生と同様に友人が重要であるということが述べられている。高校生は進学に関する悩みが顕著に出てくる時期でもある。内閣府政策統括官（2000）の調査によると，高校生の年齢に当たる 15 歳～17 歳において，「悩みや心配事はあるか，あるとしたらそれはどういうことに関してか」という質問を行ったところ，「悩みや心配事がある」とした者の中で，内容として最も多かったのは「勉強や進学のこと」のことであり，対象者の 53.9％が勉学のことについて悩んでいるという結果が

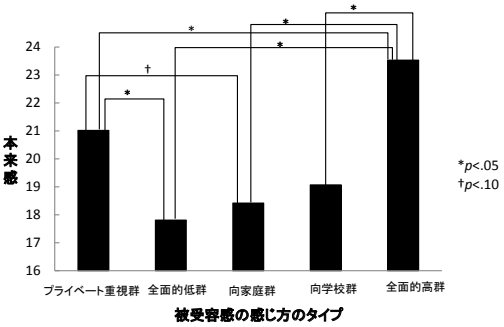

Fig.4　中学生における被受容感のタイプごとの本来感

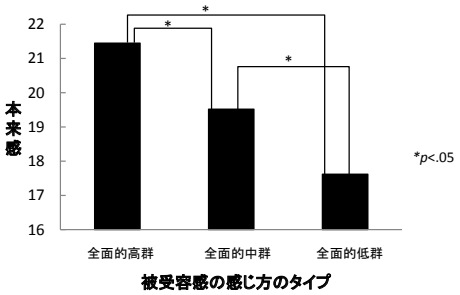

Fig.5　高校生における被受容感のタイプごとの本来感

出た。これは，同調査における他の年代（中学生，18歳～21歳，22歳～24歳）と比較しても，最も高い値を示している。これらのことから推察すると，進学に関する悩みを相談する相手として，教師との接触が増え，関係性が深まっていることが予測される。よって，先生から受容される感覚というのが，家族や友人から受容されるのと同程度に重要となってくるのではないだろうか。これらのことを踏まえると，高校生は家族・友人・先生ともに重要な他者であるという認知がなされる時期であり，それゆえに自分をさらけ出せる重要な他者からの被受容感が本来感と大きくかかわってくるのではないかと考えられる。

大学生・専門学校生

大学生・専門学校生において分析を行ったところ，有意な差がみられた（$F_{(3,311)}=9.49, p<.001$）。*Tukey* 法（5%水準）による多重比較を行ったところ，全面的高群と全面的低群，学業重視群，プライベート重視群の間に有意な差がみられた。また，全面的低群とプライベート重視群の間にも有意な差がみられた（いずれも $p<.05$）。すなわち大学生・専門学校生において，全面的高群は他の3群よりも有意に本来感が高く，さらにプライベート重視群は全面的低群よりも有意に本来感が高いことが示された（Fig.6）。

大学生・専門学校生においても，「全面的高群」は他の群よりも本来感を強く感じているという結果が出た。これは，被受容感と本来感の間に何らかの関連性があるとした仮説を支持しているといえる。大学生・専門学校生における特徴としては，「プライベート重視群」が「全面的低群」よりも本来感が高いと示されたことが挙げられる。大学生・専門学校生は青年期後期に当たるが，西平（1990）は青年期後期の第二次心理的離乳は，行動はますます親から独立し離反するものの，内面的には親に対してより親和的，建設的になるとされている。また，両親の高齢化も手伝い，感謝の気持ちも加味されるとしている。これらのことから，大学生・専門学校生は，親は重要な他者であると認識しており，親にありのままの自分を受け止めてもらっているという被受容感が，本来感の形成と関連してくるのではないかと推察される。伊藤・小玉（2006b）は本来感に日常生活習慣・活動がどのように影響を及ぼすのかということを調査した結果，男性においては友人との交遊やサークル活動，女性においてはのみ会などでみんなと騒ぐといった活動が本来感と関連していたとしている。これについて伊藤・小玉（2006b）は，男性は同じサークルの仲間や友人との相互作用の中で自身の役割や意見が相対化されることにより，社会的な文脈において個々人の自己が位置づけられるのではないかと考えられ，それが本来感と関連するのではないかと述べている。また女性については，対人関係においてありのままの自分を出していいという安心感が本来感と関わっているのではないかとしている。

Ⅳ．総合考察

本研究においては，思春期・青年期における本来感と被受容感の関連を見，被受容感を感じる対象が本来感にどのように関わるのか，またそれについて発達的な変化はあるのかということに視点をおいて調査・分析を行った。その結果，被受容感は本来感形成において関係しているということが示唆された。このことから，外的な価値基準に左右されないとされる本来感ではあるものの，やはり被受容感という要因がその形成に影響を及ぼしているということが考えられる。これは例えば，親子関係においてテストで100点を取るから褒める，友人関係においてお金を持っているからつき合う，などといった条件付きの受容ではなく，ただその人のありのままを受容してもらっていると認識することが，“自分が自分らしくいられる”という本来感の形成にとって重要であるということが考えられる。また，年齢によって誰に被受容感を感じるのか，ということも本来感形成においては大切なことであると示唆される。

Ⅴ．今後の課題

今後の課題としては，まず本来感形成について更に詳しい研究を行う必要があるということが挙げられる。今回は本来感と被受容感の関連についてみたが，他にも本来感の形成に影響を与えている要因があることは大いに考えられる。他者の目を気にしてしまいがちな思春期・青年期において，本来感形成の要因を探ることは意義があることだといえるだろう。さらに，思春期・青年期以外において本来感形成の要因を探る必要もあると考えられるだろう。近年は成人期における過剰適応の研究も行

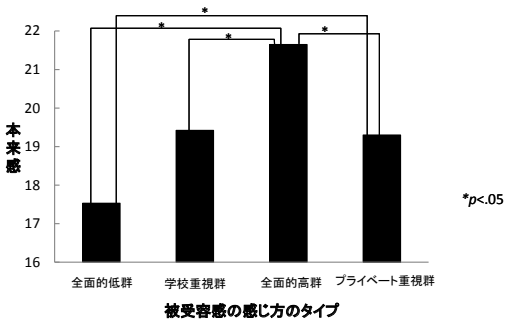

Fig.6　大学生・専門学校生における被受容感のタイプごとの本来感

われており（水澤・中澤，2010），本来感は成人期においても必要となる感覚であるといえる。また本研究において，中学校と高等学校は１つの学校において調査を行ったため，サンプルが偏っている可能性が考えられる。より正確に中学校・高等学校の現状を把握するためには，様々な学校において調査を行う必要がある。

引用文献

Deci, E.L., & Ryan, R.M.（1995）. Human autonomy : The basis for true self-esteem. In M.H.Kernis（Ed.）, Efficacy, agency, and self-esteem. New York : Plenum. Pp.31-46.

Griffin, D.W., & Bartholomew, K.（1994）. Models of the self and other : Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. Journal of Personality and Social Psychology, **67**, 430-445.

Harter, S.（2002）. Authencity. In C.R.Snyder & L.J.Shane（Eds.）, Handbook of positive psychology, London : Oxford University Press. Pp.366-381.

平岩祥子（1996）.「安心感」と自我機能の関わりについて．学習院大学修士論文（未公刊）.

Hollingworth, L.S.（1928）. The psychology of the adolescent. Appleton.

堀井俊章（2002）. 青年期における対人不安意識の発達的変化（続報）. 山形大學紀要, 教育科學, **13**(1), 79-94.

保坂亨・岡村達也（1986）. キャンパス・エンカウンター・グループの発達的治療的意義の検討. 心理臨床学研究, **4**, 17-26.

伊藤正哉・小玉正博（2005）. 自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討. 教育心理学研究, **53**, 74-85.

伊藤正哉・小玉正博（2006a）. 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討 本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して. 教育心理学研究, **54**, 222-232.

伊藤正哉・小玉正博（2006b.）自分らしくある感覚（本来感）にかかわる日常生活習慣・活動と対人関係性の検討. 健康心理学研究, **19**(2), 36-43.

James, W.（1892）. Psychology, briefer course. London : Macmilla. 今田寛（訳）(1992). 心理学（上）. 岩波書店　pp.258-260.

鎌野育代・古重奈央・真田知恵子・伊藤葉子（2010）. 小・中・高・大学生の親・家族・地域・友人との関係性の発達. 日本家庭科教育学会誌, **53**(3), 175-184.

Kernis M.H., Grannemann, B.D., & Barclay, L.C.（1989）. Stability and Level of self-esteem as predictors of anger arosal and hostility. Journal of personality and Social Psychology, **56**, 1013-1023.

益子洋人（2010）. 大学生の過剰な外的適応行動と内省傾向が本来感に及ぼす影響. 学校メンタルヘルス, **13**(1), 19-26.

水澤慶緒里・中澤清（2010）. 成人期の過剰適応尺度の作成 社会人を対象とした項目の収集, 精選と信頼性の検討. 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, **19**, 129.

内閣府政策統括官（2000）. 平成 13 年「第 2 回青少年の生活と意識に関する基本調査」結果. 1-(6), イ 悩みや心配事 http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/seikatu2/1_6.html（2012 年 8 月 15 日取得）.

内閣府政策統括官（2007）. 平成 19 年「低年齢少年の生活と意識に関する調査」結果 第Ⅱ部, 1-8-2 困ったことや悩みの相談相手. http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/teinenrei2/zenbun/2-1-8.html#2-1-8-2（2012 年 8 月 15 日取得）.

楡木佳子（2005）. 反社会的憧れを抱く中学生の帰属スタイルと自尊感情. 犯罪心理学研究, **43**, 17-35.

西平直喜（1990）. 成人になること 生育史心理学から. 東京大学出版会.

則定百合子（2007）. 青年期における心理的居場所感の発達的特徴. 日本心理臨床学会第 26 回大会発表論文集, 475.

則定百合子（2008）. 青年期における心理的居場所感の発達的変化. カウンセリング研究, **41**(1), 64-72.

近江則子・田名場美雪・田名場忍（2004）. 大学生の被受容感・被拒絶感に関する探索的検討. 弘前大学保健管理概要, **25**, 12-19.

清家美紀, 高田利武（1997）. 文化的自己観と自己査定行動 日本文化における検討. 社会心理学研究, **13**(1), 23-32.

杉山崇（2002）. 抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究. 心理臨床学研究, **19**(6), 589-597.

高田利武（1992）. 他者と比べる自分. サイエンス社.

Tannen, H., & Herzberger, S.（1987）. Depression, self-esteem, and the absence of self-protective attributional biases. Journal of Personality and Social Psychology, **52**, 72-80.

梅本信章（2000）. 友人関係. 久世敏雄・斎藤耕二（監）, 青年心理学辞典. 福村出版, 251.

山本ちか・氏家達夫・二宮克美・五十嵐敦・井上裕光（2010）. 家庭の雰囲気と全体的自己価値の関連. 中学生の社会的行動についての研究 日本教育心理学会総会発表論文集, **52**, 640.